

鯛新聞

い
わ
し
ん
ぶ
ん
共にある 共に創る暮らし
VOL. 2

2024年3月13日発行
小千谷市にぎわい交流課
複合施設開設準備室
小千谷市土川1-3-7
Tel. 0258-82-2724
tosyo-y@city.ojiya.niigata.jp

第1回西脇順三郎賞新人賞

今宿 未悠 いましゆく みゆう

慶應義塾大学政策・メディア研究科在学中。
第一詩集『還るためのプラクティス』2023
年8月刊行。さまざまな環境に身体を晒し、
その具体的体験から詩を立ち上げることを
試みている。



西脇順三郎賞新人賞受賞

――第1回西脇順三郎賞新人賞の受賞おめでとうございます。

今宿 ありがとうございます。

――今宿さんの現在についてお聞かせください。

今宿 慶應義塾大学政策・メディア研究科で、ひとの創作行為における認知過程を学んでいます。今春に卒業予定です。

――西脇順三郎賞の応募のきっかけは？

今宿 詩人の朝吹亮二さんが慶應義塾大学の詩の研究室で指導をされていて、そこで「西脇順三郎賞」をご紹介いただき応募しました。

――西脇順三郎という人物は知ってましたか？

今宿 人物は知っていましたが、正直詩を読んだことはありませんでした。受賞のご連絡をいただいたときに、ちょうど慶應義塾大学アート・センターで「西脇順三郎没後40年記念展」をやっていたので、そこで彼の残した原稿などの展示を見たり、選考委員の方から西脇順三郎の詩集を送っていただいたので読ませていただきました。

――詩を読んでみた感想は？

今宿 アート・センターの展示を通して、多摩川沿いを散歩する中で詩を立ち上げていく、彼の姿を知りました。そして自然物について話をされているのを見て、おこがましいですが、外界を見つめながら詩を書く態度自体にとっても共感しました。私自身も、詩を書くとき、自分に内在するものを書くというよりも、外界に触発され書かされる、という感覚を志向しているからです。一方で私が受賞した詩との関連性を考えたときに、なぜ私が彼の名を冠した賞を受賞したのかあまりピンと来なかったです。受賞した『猿』はとても散文的な作品だったので。

――受賞はどこで知ったんですか？

今宿 中目黒のカフェにいて、そこで市役所の方から電話が掛かってきました。

――そのときの心境は？

今宿 受賞の連絡をいただく1週間前に詩集の賞（西脇順三郎賞）の最終候補がネットに出ているという話を知り合いとしていて、そろそろ西脇賞も決まるのかねえとどこか他人事だったというか。実感が何も湧かずに頂いてしまったというのが正直なところでした。

――これまでに賞を受賞されたことは？

今宿 今回が初めてです。

――昨年6月の贈呈式はどうでしたか？

今宿 受賞したことで色々な嬉しい出来事があったんですが、その中でも贈呈式で（西脇順三郎賞受賞者の）吉増剛造さんや、選考委員のみなさんにお会いでき

て言葉を交わせたことが一番印象に残っています。贈呈式後の懇親会では、第一詩集を出しましょうと背中を押していただいたり、受賞した詩はどちらかという
と散文に近いから小説など長めのものを書いた方がいいのではというアドバイスをいただきました。その後第一詩集『還るためのプラクティス』を出版して吉増さんに献本したところ、お手紙で感想をいただけて。そうした時間がとても嬉しく有難かったです。

――吉増さんは憧れの存在だったとコメントされていました

今宿 そうですね。もともと吉増剛造さんというすごい人物がいるらしいということしか知らなくて。そこで彼の詩集を読んだところ何もわからなかったんです。逆にそこまで遠くて意味のわからない人だからできる限り接近してみようと思ひ、彼が石巻のホテルの窓に書いた詩が詩集『Voix』だと知り、自宅の窓にひたすら彼の詩を書き写すという実践を、約3か月間行っていました。その過程で、吉増さんの詩は、意味を理解しようとするよりも、そのもっと手前にある音や形などに向き合う凄みがあるのだ、ということにジンワリ気づいていきました。その実践がひと段落した直後に吉増さんが『Voix』で西脇順三郎賞を受賞したことを知って、同時に私が新人賞をいただけて、なんという巡り合わせ、と幸運を噛み締めました。

――小千谷に来られたのは贈呈式のときが初めて？

今宿 そうですね。

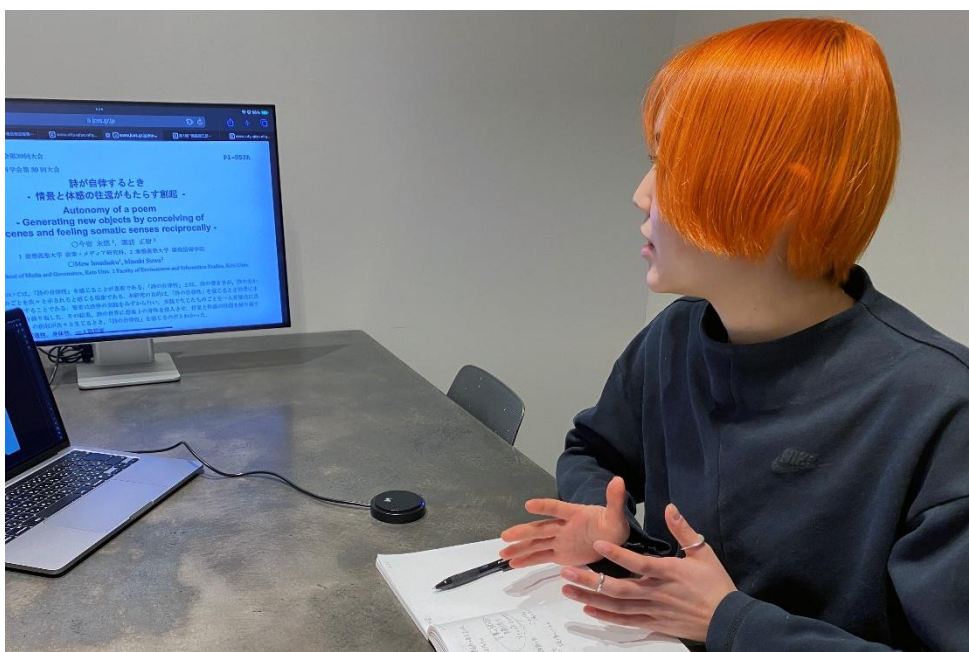
――それまで新潟には来たことは？

今宿 スキーや、中高時代の部活の合宿で行ったくらいです。



第1回西脇順三郎賞贈呈式（令和5年6月3日）の様

（裏面につづく）



オンライン取材に応じる今宿さん

——小千谷のまちはどうでした？

今宿 贈呈式の翌日に、西脇ゆかりの地を巡る小千谷ツアーをしていただきました。私は東京生まれ東京育ちなんですけど、東京の人間としては小千谷のまちはちょっと行けば高い所で開けていて、いくつもの川が複雑に合流しているのが見えたり、すぐ近くに山があったり。そういう場所で西脇さんは詩を書かれていたのだなということをツアーで感じました。あと、お昼にへぎそばをごちそうになって、そのお店から駅まで歩いた30分の道のりで見た商店街の感じと人がポツポツいらっしやる感じをととても覚えています。

——受賞後、心持ちなどで何か変化はありましたか？

今宿 これは詩作している友人ともよく話をするんですが、現代詩は定義がなさすぎて自分が書いているものが果たして詩なのかかわからない、と悩むことが多いです。ただ、新人賞をいただけたことで自分がやっていることはもしかしたら詩と言えるのかもしれないと。自己紹介するときに詩を書いてますと言うのもためらう感覚があったんですが、滑らかに言えるようになったというか。無名の一人間にそこの背中を後押ししていただけたことは有難かったです。

詩を創作する

——詩作を始めたきっかけは？

今宿 元々言葉に興味があってLancers（ランサーズ）などでライターの仕事をやっていたんですが、言葉が道具になっているような違和感を感じていました。そんなおりに、最果タヒさんという詩人を知り、そこで詩という形式があることを知りました。それでたまたま見つけた大学での詩の授業を受講したことをきっかけに、2020年4月、大学3年生から本格的に詩を書いてみよう、それを授業に持って行き人に見せてみようということを始めました。

——現代詩の魅力とは？

今宿 詩を書く魅力の話になりますが、自分が言葉の器になれる感覚があって。私が詩を書きたい理由はそこにあります。日常を生きてると自分が主体として生きていて、意識があって、自己決定を要請されることがすごい多いなと感じてしまっています。ただ、詩を書いている瞬間は言葉を使って書くというよりも言葉に書かされる状態に自分をもっていくことが大事であり、その感覚が心地よいのです。これは慶應義塾大学で詩の授業を担当する朝吹亮二さんにもよくアドバイスを受けることなのですが、言葉がむしろ主体性を持ち、私がより受動的な状態になって書いていく時の感覚や、そのときに自分が強い主体ではなく、器として存在して結果的に作品が出来上がってしまう体験、その感覚が好きで詩を書いています。

——詩はどこでどんな風に書きますか？

今宿 それを修士論文でひたすら10万字くらいで書きました。今パッと思いつく限りだと、私が詩を書くうえで重要だと感じていることは大体3つあります。1つは、日常でこれは詩であるというものに遭遇すること。例えば、昨年受賞した『猿』の作品であれば、ネパール料理屋で和歌山県的那智で狩猟をやっている方と話したときに、猿を溺れさせて殺したという話を聞き、これは詩になるなと思いました。その詩になるという経験が日常に絶対あることが大事だと思っています。2つ目はその経験に基づいて詩を展開していくときに、私はパソコンで詩を書くんですが、ひたすら縦書きでバーッと早く書いていく、そして何回も書き直していく速さ・縦書きという重力感覚も大事だったりします。3つ目は、私は身体感覚を重視しているので、自分が書きたいものだったり、見えてしまった風景に対して自分の身体がどう反応するのかを考えながら書いていくことも意識しています。

——今宿さんの論文で詩作においては「記憶」が重要なキーワードだと書かれていました。記憶をつくるために意識的に取り組んでいることは？

今宿 それは学部時代の卒論を要約したものだと思います。修士論文ではそこからさらに考えまとめました。詩は身体から書かれるものという意識があって、身体記憶をいかに増やすかという意味では、最近パフォーマンス作品に出演して、自分が感じたままに即興的に身体を動かしてみることを試みています。その即興的に動かした時に得られた感覚に根ざして、詩を立ち上げてみよう、と。あとは田舎に出掛けて狩猟をし動物の肉を切る感覚を感じたり。資本主義の中で飼いなされた都市生活のルーティーン化された身体から、いかにイレギュラーな環境に身体をさらせるかが身体的な記憶の豊かさにつながっていくと考えています。

——この事業では「共創」、インタラクション（相互作用）を大事にしています。そうした観点からご自身の詩作に通ずるものはありますか？

今宿 一編の詩を書く中に様々なインタラクションがあると思っています。身体と環境のインタラクションによって新しい感覚や想念が生まれることは、詩を書いたり発想したりするうえで私にとっては必要不可欠です。作品にするときは頭の中で作品が決まっています、それをまるで一方通行のように文字におこしていくという作業ではなくて、パソコンの画面と私自身の中のインタラクションがあってこそ詩が少しずつ形になっていくというのか。全てそうだと思いますが、例えば建築も最初からかたちが決まっているというよりも、スケッチする中で紙と建築家の間のインタラクションがあって少しずつ形になっていくと思いますし、そういう色々な外部の力を借りて一編の詩が出来上がっていく。そのインタラクションの痕跡、結果として詩が出来ていくという意味では、共創・インタラクションはまさに詩でも起きていることだと思います。

これからのこと

——これからの目標は？

今宿 普通に生活したり、パフォーマンス作品に出演したり、様々な身体的経験を重ねながら最終的にはそれを全て言葉にしていきたいという思いがあります。それは詩かもしれないし、小千谷で選考委員のみなさんから勧めていただいたように小説の形式になるかもしれない。いずれにせよ、言葉を媒体にして何かを書くということに変わりなく、言葉と結託してというか、言葉というメディアとより仲良くなってより遠くへいきたい。自分一人で頭の中で考えているだけでは辿りつけられないような世界を言葉を書くことで見るように感じている、それが沢山できたらとても嬉しいことですし、それが誰かに届いたり誰かに読まれてまたその人がその言葉を通じて別の夢を見ることができたら、それはとても幸運だと思うのでそういうことを続けていきたいです。

——図書館等複合施設ホントカ。に期待することは？


今宿 （施設のイメージ動画を見て）すごい！かっこいいですね。詩が難解と言われてしまうのは、多分詩を理解しようとする前提があるからなのかなと。子どもの頃は「あいうえお」の音の響きや、発音したときの口の感じなど、日本語をもっと純粋に楽しんでいて、そういう意味では大人もこどもとしょかんに行けばその敷居が下がるのかなと。私は絵本が好きなのですが、絵本で、高尚なメッセージや、具体的な理想像があるわけではなく、例えば「モコモコ」という言葉だけがひたすら並んでいるだけで楽しかったり。詩もその延長上にあって、難しく意味を考えなくとも、楽しめるものだと思うんです。こどもとしょかんに大人がいてもいいし、逆も然りで、色々なセクションで世代を問わず過ごせたら良いなと思います。

——どんなコラボができるでしょうか？

今宿 詩は難しいという思い込み、意味を考えだしてしまう思考の癖のようなものを取っ払うことに挑戦してみたいです。「りんご」と言ったときに、それを赤い丸い果物だ、と意味に落とし込んでしまうのではなく、その手前の言葉の音や形みたいなものの面白さを発見できるようなワークショップができたらいいです。そこから詩に入ってみることができたらいいなと思います。

——ぜひ実現したいです。今度ご相談させてください！

今宿 ぜひ！また小千谷に戻りたいので。



『選るためのプラクティス』
第1回西脇順三郎賞新人賞受賞作「猿」収録

※出版社七月堂さまオンライン
ショップ（右記QRコード）
から購入可能です。

